

**公益財団法人8020推進財団**  
**平成25年度 歯科保健活動助成交付事業報告書抄録**

1. 事業名：通院患者における摂食嚥下障害に関する実態調査研究事業

2. 申請者名：社団法人 仙台歯科医師会 代表者名：長田 純一

3. 実施組織：社団法人 仙台歯科医師会

4. 事業の概要

摂食嚥下障害は、一般的に基礎疾患を有する在宅療養患者などの要介護者に多くみられるが、服用薬物や生理的加齢の影響によるものもあり、高齢の歯科通院患者にも潜在化している可能性がある。もし、潜在化しているとすれば、医療従事者としては積極的に患者教育し検査診断を行って障害の改善を図る必要がある。しかしながら、通院患者の摂食嚥下障害に関する実態調査は極めて少ない。そこで、本事業は高齢歯科通院患者における摂食嚥下障害の実態を把握することを目的とし診療所に来院する高齢者に①嚥下機能に関するアンケート②嚥下機能評価（改訂水飲みテスト、R S S Tおよび頸部聴診）を行った。

5. 事業の内容

①調査実施説明会の開催 毎年行っている口腔機能スクリーニング講習会を嚥下機能評価に焦点をあて、講師を依頼し行った。参加者は歯科医師会会員36名であった。

②調査実施 仙台歯科医師会会員に調査実施を依頼し協力を得た診療所において65歳以上の受診患者を対象に聖隷式嚥下質問用紙のアンケートを行い、次いで嚥下機能評価（改訂水飲みテスト、R S S Tおよび頸部聴診）を行った。なお、調査実施に当たり対象患者には調査の内容と意義を十分説明し同意を得て行った。

③調査結果 調査対象者は141名（男性64名、女性77名）、平均年齢77.3歳であった。

そのうち、聖隷式嚥下質問票アンケートで54名（38%）は摂食嚥下障害の疑いはなく、87名（62%）は疑われた。

改訂水飲みテストでは、嚥下あり呼吸切迫（Silent aspirationの疑い）が3名、嚥下ありむせまたは湿性ありが6名認められ、9名（6%）は摂食嚥下障害の可能性を示唆した。

R S S Tでは23名（16%）は3回未満であり、摂食嚥下障害が疑われた。

頸部聴診では、b) 咽頭収縮の減弱。喉頭挙上障害。食道入口部弛緩障害の疑いが65名（46%）、c) 誤嚥の疑いが3名（2%）、d) 誤嚥または咽頭残留の疑いが9名（6%）であった。

6. 実施後の評価（今後の課題）

結果のように少なく見ても通院患者といえども高齢者の2~6%は摂食嚥下障害をきたしている可能性が示唆された。このような患者に誤嚥性肺炎の予防や嚥下機能の維持向上の重要性を説き、口腔機能向上により介護予防に寄与することは、歯科の役割として必要であろう。また、嚥下機能検査は簡便な反面評価が難しく術者の訓練が必要である。聖隷式嚥下質問票は患者に飲み込み状態に関心を促すツールとして有用であると思われた。